

異言語文化研究 手がかりとしての対照語源学の試み

植 田 康 成

1 はじめに

日本語の「雷」の語源は、どのようなものであろうか。『日本語源大辞典』(前田 2005: 354)では、「神鳴り」の意味であるという説明がなされている。そして「参考」の項に、「古く、恐ろしい神を意味する「いかづち」が(自然現象としての)かみなりを表す一般的な語であったが、歌の中では「雷鳴」の意の「鳴神」が多く用いられた。この「雷鳴」の側面を「神、鳴る」とも表し、その連用形から「かみなり」が生じたと考えられる」¹⁾、とある。自然現象としての「雷を靈物視したもの」ということになる。すなわち、擬人的な理解に基づいている命名ということである。「いかづち」は、怒りの槌、ということであろう。つまり、雷神が怒って槌を振り下ろして大音声を立てているのだと捉えているのである。これに対して、ドイツ語の *Donner* (雷) については、どうであろうか。これは、北欧神話の *Thor* 神と関連しており、ゲルマンの天気の神様の名に由来している。ドイツ語の方も、自然現象を擬人的に捉えているのである。

言語研究の一分野としての語源学の歴史は古い。対照言語学の一分野として、任意の2言語の語彙の語源を比較対照するという試みは、そのものとしてはまだ確立されてはいないと思われる。そもそも一つの研究分野として成立し得るものかどうか分からない。本論者は、外国語教育、あるいは異文化研究、異文化コミュニケーションに関する研究の一部分として、対照語源学というものが、どのようなものであり得るのか、そこから外国語(ドイツ語)教育、異文化研究にとって、どのような知見を得ることができるのか、ドイツ語と日本語の例を手がかりにして考えてみたい。

2 語源学について

実践においては長い歴史を持つ語源学であるが、その理論的基盤については、それほど顧みられることはなかったようである。アリネイ (Alinei 1995) は、語源学の目的、方法に関して、語源学の定義を検討することによって、明確に定めようとしている。語源学が成立する前提となっているのは、語の不透明性 (opacity of words) である。語の不透明性を、透明にするというのが、語源学の課題であり、語の誕生について思弁を連ねることが、

語源学の課題ではない。あるものがなぜそう呼ばれているのかは、記号の恣意性であり、命名の必然性については何も言い得ないというのが、言語学の基本理解であるからである。しかし、対象のどのような側面に焦点を当てて命名がなされているかについては発言しても許されるだろう。たとえば、「眼鏡」は英語では *glasses*、ドイツ語では *Brille*、フランス語では *lunettes*、イタリア語では *occhiali* という²⁾。英語では材料、ドイツ語では材質、フランス語では外観（小さな月）、イタリア語では機能（目にかかわるもの）に焦点が合わされている（Alinei 1995: 14）。

アリネイによると、語源学（Etymology）は、一つの学問分野であるというよりも、語彙の一般的な連続性を背景として、（音声、意味、空間、社会、言語上の）不連続性という、語の歴史における不透明性を透明にするべき発見の手続き（discovery procedure）であるという（Alinei 1995: 13）。先行の定義を批判的に検討し、自らの提案を具体例による考察で段階的に拡大修正して、アリネイが最終的に提案する語源学の定義は、次のようなものである（Alinei 1995: 22-23）。

（35）語源学は、「段階的な発見の手続きである」。語彙の一般的な連続性を背景として、厳格な方法的制限に基づいて、不透明な語の歴史における（音声、意味、空間、社会、言語上の）不連続性と思われるものを追究し、最終的に透明にするという目標を持っている。この目標が達成可能なものだとすると、語源学は、動機付けを持った語が誕生した特別な社会的コンテクストを再構成する試みであると見なされよう。それは、理論的辞書学が探求してきた辞書化と同じ過程であるといえる。思弁的な性格の語源学は、形式的な動機付けの点で不透明な語を射程に収めているが、これは、より記述的な、歴史的な方向付けをもった性格の語源学とは区別されなければならない。後者は、動機の点で透明な語を取り扱うものであり、不透明なのは、文化に関する面だけである。語源学は、厳密な意味における語の起源（origin of words）に、体系的な方法で、到達しようとするものでは決してない。すなわち、語の発生（glottogony）という問題に関わるものではない。不連続性の可能な最終レベルに到達するとき、語源学の目標は達成されたといえる。些細な意味的变化をのぞいて、いずれの形の不連続性も発見手続きにおける一つのステップであり、単一の語源学をなすものといえる。

定義の詳細については、アリネイの当該の論文を読みたいが、本論考の主題である対照語源学の構想にとって重要なのは、語源学が究明すべき事柄として文化的不透明性（cultural opacity）というものが指摘されていることである。英語の *lord* は *loaf-ward*（*bread-keeper* という意味の古代英語 *hlafweard*）にさかのぼり、当時の社会習慣、制度に根ざしている。一つの語の成り立ちから、その語が誕生した時代の社会文化史が見えてくるというわけである。すなわち対照語源学が究明すべきことの一つとして、そのような社会文化史の側面を明らかにしていくことが含まれるということになる。

3 比較対照のための資料源と視点

3.1 研究のための資料源

言語素材としては、単一語と複合語、句（慣用句）を取り扱うことになる。

日本語については、最近刊行された 2 つの語源辞典、すなわち『日本語源大辞典』（前田 2005）と『語源海』（杉本 2005）に依拠する。ドイツ語については、Kluge: *Etymologisches Wörterbuch*（Kluge 1989, 22. Auflage）、Mackensen: *Ursprung der Wörter*（Mackensen 1985）、そして Pfeifer（Hrsg.）: *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*（Pfeifer 1989）の 3 つに基づく。

比較対照する表現の選定であるが、日本語については、日本方言地図に収録されている語彙の中から名詞である単一語と複合語を抽出する。ドイツ語については、ヨーロッパ言語地図に収録されている語の中から名詞を抽出する。そして、両者に共通する表現を、比較対照考察の対象とする、というのが、本論考の目指すところである。

句（慣用句）については、両言語の慣用句辞典から、表現を収集する。日本語については、『成語林』（尾上 1992）を資料源とする。ドイツ語については *DUDEN 11: Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Idiomatisches Wörterbuch der deutschen Sprache*（Drosdowski/Scholze-Stubenrecht（Hrsg.）1992）を主たる資料源とする。そして、本論考においては、動物名を構成要素とする慣用句を中心として、比較対照を試みる。

3.2 比較対照の視点

何を基準にして比較対照を行うか。本論考では、単一語と複合語については命名の動機、句（慣用句）についてはその背後にある比喩的イメージを、比較対照の視点すなわち比較の第三項とすることになる。

4 本論：命名の動機付けと比喩的イメージに関する考察

4.1 単一語（Simplex）

「クマ」は、どうして「クマ」というのか。黒い馬のようだから「クマ」というのか。「くらがりに住むところから、クマ（隈）の義か<和句解>」（前田 2005：434）。「ネコ」は、寝てばかりいる小動物だから、「ネコ」なのか。そのような、いわゆる民間語源的な説明は、面白いが言語学的な信憑性に欠ける。犬や牛、あるいは山羊などについては、その鳴き声が名前となったのだという自然音源説といったものも言語の起源について提唱されてきた。「わんわん説」「もうもう説」「めーめー説」といったものである。そういった動物の日本語における名前に限っていえば、子供の言語獲得の過程でも同様のことが観察されることが、そのような説に至る論拠となっていたと考えられる。事物の性質、形態が命名の動機となっていることを物語っている。他方「机」は、その形態が重要というよりは、機能が決め手となっている。林檎箱でも、机として利用することができる。

日本語では「本」といっているが、そもそもはものごとを書き記したものが木や竹であったので、それを数えるときに「本」といっていたのが、書き記された媒体そのものをさすようになったというのが、日本語の語源辞典が教える所である。これに対して、ドイツ語では「本」を *Buch* というが、これは、現在のドイツ人の祖先であるゲルマン人が、かつて、ブナの木の子葉や皮をいわばメモ用紙として使っていたことに由来している。日本語では数えるときの助数詞が、ドイツ語では素材の名前が、後世に発明された「本」の名前となっている。単一語の命名の動機を詳しく調べることは、なかなか困難な作業だが、それを通して、それぞれの言語文化の歴史やそれぞれの命名の背後にある発想というか、考えの違いがわかりやすい形で見えてくるといえる。そういったような知見をもたらすものが対照言語学であると考えている。

4.2 複合語 (Kompositum)

古代の日本人は、虹を「雨の浮き橋」(『古事記』)と呼んでいた。日本語の歴史的展開の中で、そのような詩的とも言える表現は、中国由来の「虹」に取って代われ、現在の日本語では、各地の方言も含めて、「虹」一語という状態になっている。もちろん、各地の方言による細かい音声上の違いはある。たとえば、筆者(植田)の第一言語である奄美・徳之島方言では、[ne@gi] というが、どのような音の変化を経ているかは、容易に理解できるであろう。中国語の「虹」は、その漢字の成り立ちからいうと、複合的であるが、偏となっている「虫」は、本来は「竜」を意味している。旁の方の「工」は、「水流の大きいさまを表し」ている。「虹」という漢字からは、「虹」が「竜」と関係づけられ、そしてまた「水」とも関連づけられているということがわかる。日本の各地に、「竜」がついた名前の池や、滝、沼がたくさんあることから、そのことは納得がいくのではないだろうか。「竜神」は、水の神様でもある。神社の入り口にある手水場には、竜の口から水が流れているのがよく見られる。「竜巻」の名前は、まさに竜をイメージしてつけられたものといえるだろう。

日本からヨーロッパに目を転じてみるとどうか。『ヨーロッパ言語地図』(atlas linguarum europae)の Volume I (1983) 及びその言語地図についてのコメント (atlas linguarum europae commentaires Volume I (1983)) によると、ヨーロッパの諸言語(方言)においては、「虹」の名前は、まず単一語か複合語という点で大きく2つに分かれる。ロシア語を代表とするスラブ語では単一語となっている(**dogá*)。複合語の場合は、命名の動機が明瞭に見て取れるのだが、まず、事物による命名か、動物による命名かに、分かれる。つまり、英語 *rainbow* やドイツ語 *Regenbogen* のように「雨の弓」となるか、イタリア北部におけるドイツ語 *regenwurm* (みみず) やイタリア語 *drago* (竜) という具合である。そしてさらに、擬人的な命名(スペイン語: *arco iris*) や、キリスト教、イスラムの影響による命名(フランス語: *la roue saint-bernard*) が見られる。

日本語では「首都」というが、ドイツ語では *Hauptstadt* (頭の都) である。英語とイタリア語は、いずれもラテン語の *capo* (頭) に由来しているのだが、*capital* および *capitale* である。ここからわかるのは、日本語では「首」が換喩的に「頭」をも意味しているということである。

「目玉焼き」は、卵を目と見立てた命名である。ドイツ語では *Spiegelei* (鏡の卵)、イタリア語では *uovo al tegamino* (小さなフライパンで焼いた卵)、英語では *fried egg* という。イタリア語、英語では、料理のしかたによる命名と言うことになるが、ドイツ語は日本語と同じように比喩的な表現になっている。ドイツ語の場合は、さらに「鏡」が介在して、鏡に映った目であるという捉え方をしていることになる。

日本語の「横断歩道」は、アメリカでは *crosswalk*、イギリスでは *zebra crossing* という。いずれも「横断」「横切る」という表現が含まれていることから、日本語の「横断歩道」は、そもそもはアメリカ英語 *crosswalk* の翻訳語であるのかもしれない。いずれも、用向きというか、機能が命名の動機となっている。イギリス英語では横断歩道の形状が命名の動機となっているといえる。ドイツ語では *Zebrastreifen* というが、これは英語と同じく形状が命名の動機となっている。イタリア語では横断歩道の機能をもっと端的に限定的に捉えて *le strisce pedonali* (歩行者が横切る帯) と呼んでいる。

「日の出」は、英語では *sunrise* (太陽が昇ること)、ドイツ語では *Sonnenaufgang* (太陽が昇ること)、イタリア語では *il sorgere del sole/lo spuntare del sole* (太陽が昇ること/太陽の出現) である。英語とドイツ語は、同じ捉え方をしている。これは両言語が同じゲルマン語に属していることに理由があるのだろう。これに対して、日本語とイタリア語が、同じような発想で捉えているのが興味深い。ついでながら、日の出：日の入り、*sunrise: sunset, Sonnenaufgang: Sonnenuntergang* は、それぞれ対をなしているが、イタリア語では「日の出」のほうは、英語、ドイツ語と同じだが、「日の入り」にあたるのは *il tramonto* で単一語となっている。*tramonto* は、動詞 *tramontare* と関係があるといえるが、この動詞は「消え去る」という意味であり、日本語同様、太陽を擬人的に捉えている³⁾。

日本で夏を象徴する「入道雲」をドイツ語では *Quellwolken* (泉の雲)、英語では *thunderhead* (雷の頭) あるいは *towering cloud in summer* (夏に見られる塔のような雲)、イタリア語では *cumulo* (積乱雲) と呼んでいる。英語の *thunderhead*、イタリア語の *cumulo* は、自然科学的(気象学的)な命名である。そして、英語の *towering cloud in summer*、日本語の入道雲は、巨大さあるいは坊主頭に着目した命名となっていると考えられる。ドイツ語の *Quellwolken* は、本来的には入道雲の発生のしかたに着目しており、その意味では自然科学的といえるが、命名そのものは他の分野からの語を採用して、比喩的なものとなっている。噴き出してくる水が泉の底の砂を吹き上げているようすが、雲の発生のしかたと似ていると言うことであろう。

日本語では「魚の目」というが、ドイツ語では *Hühnerauge* (鶏の目) という。そして、

イタリア語では、occhio di pernice（山うずらの目）である。いずれの言語でも「目」にたとえられているが、その動物が違っている。ついでながら、英語では corn というが、これは、麦粒のように硬くなった皮膚の箇所というような捉え方をしている。

最後に、尾籠な話になって恐縮だが、日本語の便座はドイツ語では Klobrille（便所の眼鏡）という。英語では a toilet seat（便所のシート）、イタリア語では sedile del gabinetto（便所の椅子）である。ここでも、機能的な命名か、形状に焦点を合わせた比喩的な命名かという対立がある。

4.3 句（慣用句：Phrase）

諸言語における比喩的な捉え方、イメージを句レベルで比較検討する一番最適な手がかりは、慣用句（イディオム表現）であるといえる。これについては、ドイツ語と日本語のイディオム表現を中心に見ていくことにしたい。イメージの違いが一番よく見て取れるのは、動物に関してである。

日本語の「狸寝入り」は、英語では fox sleep（狐寝入り）である。ドイツ語で schlafen wie ein Dachs（狸のように寝ている）といえは、「ぐっすり寝込んでいる」ということであり、日本語の「狸寝入り」と同じ意味ではない。

ドイツ語においてはイディオム表現の構成要素としては「蟻」は登場していない。日本語については『成語林』（尾上 1992）には 12 の「蟻」を構成要素とする言い回しが収録されている。それらの言い回しを見る限り、蟻の身体の小さなこと、従って、その行為も取るにたりないということが中心的な意味をなしている。しかし、その小さなものが多数集まり（「蟻も軍勢」）、小さな行為が積み重なると大事業に至り得る（「蟻の塔を組む如し」ということも言われている。何よりも「蟻の歩み」という言い回しが多く日本人にとっては、「蟻」の勤勉さを言い表しているものといえるだろう。しかし、ドイツ語母語話者にとって勤勉さは、より一般的には、ミツバチの特性として連想されているようである。まさに、bienenfleißig（ミツバチのように勤勉な）という形容詞の存在がそのことを証している。ドイツにおいても『イソップ物語』の中の「蟻とキリギリス」の話は、あまねく知られているにもかかわらず、である。

「牛」も、日独の間では、そのイメージに大きな差がある動物といえる。日本語の「牛（うし、ぎゅう）」を構成要素とするイディオム表現を見る限り、鈍重さが慣用的意味の中心をなしている。牛は、歩みは遅くても、確実に前進する忍耐強い動物として、プラス評価されている。菅原道真をまつる天満宮においては、道真公と並んで信仰の対象となっている（これは、隣接性、つまり換喩的な思考によるものである）。これに対して、blöde Kuh（愚かな雌牛）という女性に対する罵り言葉に代表されるように、ドイツ語のイディオム表現における「牛」は、決していい意味を持ってはいない。heilige Kuh（神聖な牛）という言い回しがあるが、これはヒンドゥー教の見方をドイツ語に取り込んだものであり、

ドイツ語本来の表現ではない。牛に対する日独のイメージの違いは、農耕作業において欠かせない貴重な労働力としての「牛」と、牧畜においてミルクを供給し、人間に利用されるだけの存在としての「牛」という捉え方の違いに起因していると考えられる。「牛歩」という表現も、鈍重さを強調しているものであり、決して否定的な意味合いはなかったといえるが、日本においては政党間の国会における戦術として用いられたため、与党によって否定的な意味が付与されて、固定してしまっている。ドイツ語にも、「牛歩」という意味の *Ochsengang* という表現があるが、これは、とりわけ役人（公務員）の「苦難に満ちた長い昇進の行程」という意味を持っている。

Sieben auf einen Schlag（一たきで7つ）というのは、『グリム童話』の「勇敢な仕立屋さん」に基づく言い回しである。実際に布きれで叩き落としたのは蠅だったのだが、「一発で7つ」（*sieben auf einen Streich*）とだけベルトに刺繍取りして、「蠅」という語は省いてふれ回ったので、ひとびとはこの仕立屋を一人で7人の人間をやっつけた勇敢な男だと誤解したのである。仕立屋は、そのような奸智と機転によって、最終的には王女様と結婚し、王になったという、出世物語である。普通は *zwei Fliegen mit einer Klappe schlagen*（2匹の蠅をたたき落とす）と表現する。数を7にして *sieben Fliegen mit einer Klappe schlagen* といえば、ほらを吹くということにもなる。さらにイタリア語の対応する言い回しは *prendere due piccioni con una fava*（一つの空豆で2羽の鳩を捕まえる）である。日本語の「一石二鳥」は、元々は *To kill two birds with one stone* というイギリスの諺に由来している。より古いのは、中国語から持ち込まれた「一挙兩得」ということのようにである。

日本語では非常に仲の悪い間柄を「犬猿の仲」というが、ドイツ語では *leben wie Hund und Katze*（Duden 1992: 440）と表現する。他の場所でも述べたが、日本のおとぎ話「桃太郎」では、犬、猿、雉が桃太郎のお供として、協力し合って、鬼を退治する。仲の悪いものが、鬼を共通の相手として、連帯して戦う。他方ドイツの『グリム童話』の中の「ブレーメンの音楽隊」は、馬、鶏、犬、猫が一致協力して、盗人の一味を脅して、家に乗取り、仲良く余生を過ごすという話である。ここでも仲の悪い犬と猫が連帯している。「ブレーメンの音楽隊」では、リーダーがだれであるか明確ではないが、共通の対象に向かって仲の悪い者を連帯させるように導くということが、リーダーたるものの備えるべき資質だということを、これらの物語は語っている。

「犬」や「牛」のように、ペットあるいは家畜として人間と生活を共にしてきている動物も多くいる。なじみとなった動物の外見、行動の特定の特徴が言語表現に取り込まれ、イディオム表現となっていると考えられる。実際の言語表現は、暗喩である場合もあるし（「魚の目」）、直喩である場合もある（「猫の鼠を伺うよう」）。動物のどのような外見的特徴、どのような行動の特徴、あるいは人間にとっての有用性、有害性のいずれに焦点を合わせてとらえているかが、表現の意味内容を決めている。そして、その焦点の合わせ方は、言語によって、同じである場合もあるし、異なっている場合もある。それを明らかに

していくことも、異文化間研究としての対照語源学の課題といえるだろう。

5 おわりに

W・フィーレック (W. Viereck) は、ある論文の中で次のようなことを述べている。

「・・・木イチゴという名は、とりわけ、そのイチゴの色 (たとえば、英語 Blackberry 等) や、その植物が持っている小さなとげ (たとえばイタリア語 *mora di spina*)、あるいは果実の形 (例えばロシア語 *kamy*)、茂みの形 (たとえばスウェーデン語 *snärebär*)、似た外観の動物 (例えばスラブ語 *ěz* (ハリネズミ))、当の植物が生えている場所 (例えば「野」や「水」「川岸」や「森」) といった多様な動機けに基づいて命名されている。しかし、フィーレックは「こういった動機はすべて本論文が関与するものではない」として、さらに次のように述べている。「ここでもっと重要なのは、あとで示されるように、木イチゴの場合についていうと明らかにそれほど多いとは言えない命名だが、例えばスウェーデン語の *käringbär* (魔女の苺) や *salomonbär* (ソロモンの苺)、あるいはポーランド語の *dziad* (おじいさん) といった名前である」(Viereck 2003: 120)。

フィーレックは、ヨーロッパ諸国の同じ事物に対する名前の比較にもとづいて、それらが、人類文化の歴史的展開を反映しているものであるとしている。命名のあり方を全ヨーロッパ的に検討してみると、宗教的な枠組みによる命名、超自然的・超人間的な命名、動物に似せた命名・親族関係に基づく命名という3つの層が見て取れるとしている。それらの層が、命名の動機付けに大きく与えていると考えている。事物の認識のあり方、そして命名の動機付けの枠組みを決定しているという。

日本語の例でいえば、「日の出」「日の入り」が擬人的な命名と言うことになる。そして、「虎の尾」「龍の髭」「竜舌蘭」等が、動物に似せた命名と言うことになる。「入道雲」「彼岸花」「釣鐘草」「菩提樹」等は、明らかに仏教的な命名である。この連関で、興味深いのは、おそらく中国語から持ち込まれた「虹」以前に日本語に存在した「雨の浮き橋」といった命名である。それは、中国語の発想以前の、古代日本語、そして古代日本人の発想を示すものと考えられるからである。

比喩的な理解は、ある領域の事物 (比喩の適用対象) を、それとは別のよく知られた領域の事物 (比喩の提供者) になぞらえて理解するというものだが、ケヴェチェス/サボー (Kövecses/Szabó 1996) は、イディオム表現の意味理解は、概念的暗喩、概念的換喩、慣習的知識の3つに基づいているとしている。そのケヴェチェス/サボーの説をフィーレックの構想と考え合わせるならば、次のようなことになるだろう。われわれが比喩的な理解をおこなう時、その比喩の提供先が、大きくいって、フィーレックがいう、命名の動機付けの3つの層によって規定されている場合が多いということになる。

本論考では、日本語、英語、ドイツ語、イタリア語における表現を比較してみると、それぞれの言語表現の背後にある発想、比喩的な捉え方、認識の枠組みの違いが見て取れる

と言うことを示したつもりである。それぞれの言語で、焦点が合わされている特性に違いがある。そのような違いを認識すること、発想の多様性を知ることにも、異言語を学習することの意味があるのではなかろうか。ある外国語をある程度マスターして駆使できるようになった中級レベルの学習者にとって、それはまた忘れかけた初心、驚きを今一度想起し、外国語学習をいつまでも興味深く続けていける動因となるであろう。

6 注釈

- 1) ちなみに、筆者の方言（鹿児島県大島郡徳之島）では「雷」を「鳴る神様」と称していたが、若い世代は「雷」しか知らなくなっているようである。
- 2) ドイツ語で眼鏡を意味する *Brille* という語は、ローマの皇帝ネロ（紀元 37 - 67）が愛用していたベリル（緑柱石：エメラルド）製の単眼鏡に由来しているようである。マッケンゼンの語源辞典の *Brille*（眼鏡）の項には、*Beryllus*（緑柱石）の光学的性質が 1300 年に明らかになり、利用されるようになったことが述べられている。日本語の「めがね」は、『日本語源大辞典』には [参考] として、「人や物の善悪・才能・可否などを見抜くこと」という意味である「目ききの意の「目のさしがね」から眼鏡のこともいうようになったものか」と述べられている。「目のさしがね」から「めがね」となったということである。従って、「眼鏡」という漢字表記は、当て字といえるようである。
- 3) 本論考は 2005 年 9 月 3 日（土）、岡山市ノートルダム清心女子大学で開催された第 35 回西日本言語学会で行った口頭発表が基になっている。イタリア語の *il tramonto*（日没）及び *tramontare*（日が没する、隠れる）は、そもそも *monte*（山）と関係しているとの教示を発表の際に学会長である古浦敏生先生からいただいた。『伊和中辞典』（第 2 版、小学館）には、[tra+monte（山のかなたに行く）が原義] とある。この語を使っていた人々が居住していたところは、西方に山があったということになろう。なお、本論考は、科学研究費補助金（基盤研究(C)、研究課題：「言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーその潜在的可能性に関する基盤的研究」、課題番号：17520379、研究代表者：植田康成）による研究成果の一部である。

7 参考文献

- Alinei, Mario 1983:** Arc-en-ciel. In: *Atlas Linguarum Europae. Vol.I.1 - Commentaires. Premier Fascicule*. Assen: Von Gorcum, 47-80.
- Alinei, Mario 1991:** New hypotheses on the linguistic origins of Europe: the contribution of semantics and dialectology. In: *QUADERNI DI SEMANTICA*, 12/2, 187-203.
- Alinei, Mario 1995:** Thirty-five definitions of etymology or: Etymology revisited. In: Winter (Hrsg.) 1995, 1-26.
- Drosdowski/Scholze-Stubenrecht (Hrsg.) 1992:** Drosdowski, Günther /Scholze- Stubenrecht,

Werner (Hrsg.) , *DUDEN 11. Redewendungen und sprichwörtliche Redensarten. Wörterbuch der deutschen Idiomatik*. Mannheim/Leipzig/Wien/Zürich: Dudenverlag.

Harras, Gisela/Haß, Ulrike/Strauß, Gerhard 1991: *Wortbedeutungen und ihre Darstellung im Wörterbuch*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Kluge, Friedrich 1989: *Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. 22. Auflage unter Mithilfe von Max Bürgisser und Bernd Gregor, völlig neu bearbeitet von Elmar Seebold. Berlin/New York: Walter de Gruyter.

Kövecses, Zoltan/Szabó, Péter 1996: Idioms: A View from Cognitive Semantics. In: *Applied Linguistics*, Vol. 17, No.3, 326-355.

Mackensen, Lutz 1985: *Ursprung der Wörter. Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache*. Wiesbaden: VMA-Verlag.

前田 2005: 前田富祺監修『日本語源大辞典』、東京、小学館。

尾上 1992: 尾上兼英 [監修]『成語林』、旺文社。

Pfeifer, Wolfgang 1989: *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*. Erarbeitet von einem Autorenkollektiv des Zentralinstitut für Sprachwissenschaft unter der Leitung von Wolfgang Pfeifer. Berlin: Akademie-Verlag.

Strauß, Gerhard 1991: Metaphern - Vorüberlegungen zu ihrer lexikographischen Darstellung. In: Harras, Gisela/Haß, Ulrike/Strauß, Gerhard 1991, 125-211.

杉本 2005: 杉本つとむ著『語源海』、東京、東京書籍。

Viereck, Wolfgang 2003: Der *Atlas Linguarum Europae* und seine Einsichten in die Kulturgeschichte Europas. In: *Historicni seminar 4. Zbornik predavanj 2001-2003*. Ljubljana: ZRC SAZU, Založba, ZRC, 119-130.

Werner, Winter (Hrsg.) 1995: *On Languages and Language. The Presidential Addresses of the 1991 Meeting of the Societas Linguistica Europaea*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.